
狐神リアル・・・こっくりさん

カービー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐神リアル・・・こっくりさん

【Nコード】

N7357A

【作者名】

カービー

【あらすじ】

最初にこっくりさんを始めた時……高校2年生から、大学2年生へと翔達も成長し、こっくりさんからも解放され、以前こっくりさんだった竜崎季梨リュウザキキキサとも仲良くなり、毎日平凡な日々を過ごしていた。だがある日、学校へと早く来すぎた5人は図書室で暇つぶしをしようと思っていた時……隅でこそそと何かをやっている3人の女の子達を見付けた。女の子達がしていたことは”こっくりさん”だった。そこから翔達の今後は急展開を向かえることとなる。

プロローグ（前書き）

皆さんお久しぶりです、こんにちは^^以前こちらで「リアル・・・こっくりさん」を投稿させていただきました「カービー」ともうしますwまたこっくりさんが書きたくなり、かかせて頂くことになりましたw前作は誤字などが多く、小説も説明不足で大変申し訳ございませんでした……。この作品は前作より上ランクを狙って書いていこうとおもいますので、宜しくお願い致しますw

プロローグ

あの事件から2年が経った。

僕等はまだ大学2年生だった。

俺……橋本翔ハシモト ショウは有名な頭が良い大学に受かり、
宮本明奈ミヤモト アキナと佐藤光サトウ ヒカルと
石田真理イシダ マリも同じ大学を受け、合格している。

そして……こっくりさんだった竜崎季梨リュウザキ キサさんも同じ大学を受け、合格。

僕等は平凡な毎日を送っていた。

あの事件の記憶もなく、僕等は大学でも仲良しの5人組と言われる仲だった。

しかし、僕等の平和な毎日を壊す事件が再び、2年の時を越え幕をあけようとしている。

そう……季黎さんをこっくりさんに変えた狐キツネの神の復讐として、僕たちに再び襲いかかるうとしている。

第1話：「始まりの合図」

「翔ー！ おはよう」

大学の門の前で大声で俺に挨拶をしてきたのは、いつも一緒に居る季黎だった。

「季黎、おはよう」

相変わらず、見通すかのような目で俺を見てくる季黎の目を見ると緊張が耐えない。

「今日はなんだか、肌寒いね！」

季黎はそう言いながら苦笑いをしてくる。

前から思っていたが、季黎は俺たちに対する様子が変わる。なんだかよそよそしかった……。。

「翔ー！ 季黎ー！」

遠くから俺たちの名前を呼んで、走ってくるのは明奈と真理と光だった。

「おはよう」

俺と季黎は挨拶をし、今日も頑張ろうね。という事を話ながら教室に向かう。

下駄箱を見たら数人の靴しかなかった。

「あれ？何でこんな少ないんだ？」

不思議そうに質問する光に、明奈は冷静に答えた。

「だってまだ学校が始まる1時間前だからだよ」

時計を見たらまだ7時30だった……。一限目は8時30分からだ。ちやっかり1時間早く来てしまった。

「1時間前だったら誰も居ないに決まってるね」

真理は欠伸をしながらもごもごと言っ。

とりあえず俺たちは風辺りが良い図書室に移動した。

「あーやっぱり風辺り良いね」

俺たちは適当なイスに腰掛けた。隅っこでござこそ物音がしているのが聞こえた。

何だ……？

俺たちは、物音がする方へ静かに近寄った。すると、女の子3人が床の上で一本の鉛筆を握りしめ何かをしている。

女の子達からは、俺等が図書室に入ってきた事なんて知りもしなかった。それほどゲームに夢中になっていたという事だろうか。

だが……彼女達がしている遊びは俺たちの運命を呼び戻させる遊び
だった。

「 じっくりさん、じっくりさん」

第2話：「季梨の病」

こつくりさん……？何で今頃こんな懐かしい遊びをしているんだ？

俺達5人は何も言わずただ、彼女達の遊びをジッと見ていた。

「こつくりさん……おいで下さい」

こつくりさんなんて来てる訳がないのに。こんな小さい遊びをして何になるんだ？

すると一人の女の子がやっと俺たちに気づいた。女の子はビックリしすぎて、鉛筆から手を離してしまった。

「由香里！ 鉛筆から手を離しちゃ駄目」

2人の友達が一声に手を離した子へ言いかける。

「だ……だって」

手を離れた女の子は、涙目で俺たちの方を見てきた。

俺たちなんかしたか……？

残りの女の子2達も俺に気づいたが、どうやら冷静にゲームを終わらせている様子だった。

「こつくりさんこつくりさん……お返事ないなら、今日はやめますので、鉛筆を離します」

そう言つて、女の子達は鉛筆をゆっくりと離した。

「いつから居たんですか？」

一人の女の子は俺たちに不満そうに聞いてきた。

「最初っからです、何もいわなくて……すみません」

「いえ……」

女の子達3人は結局、最後まで不満そうな表情を見せながら図書室から出て行つた。

「なんなんだ？」

俺はそう言いながら頭を押さえて皆の方を見る。

しかし、季黎はとても体がガタガタに震えており、パニック症状み
たいなものに陥っていた。

「何でこっくりさんなんか……」

こっくりさんに何か嫌な思いでもあるのかな？

何も覚えてない俺たちは季黎の事を他人事のように思っていた。俺
たちはこの時までには幸せだったんだ。

ここから俺たちの恐怖の運命は始まりを告げることになる。

第3話：「よみがえる記憶」

ガタガタと震えている季黎を、俺たちは皆で支えた。

「大丈夫か？ 何があつたんだ？」

「こ　こつくりさんには嫌な思い出が……」

そう言つたきりいくら俺たちが質問しても答えようとしない。

「大丈夫よ、落ち着いて？ こつくりさんで何か深い思い出があつたのは分かつたから……」

真理は精一杯季黎に安心できる言葉をかけてあげた。

季黎はどうにか泣きやみ、床に落ちていた鉛筆を恐る恐る見ると、何かの記憶がよみがえつたように……また頭を抱えて悲鳴をあげました。

「いやあああああ」

季黎はあきらかに可笑しくなっていた。俺たちは季黎を保健室に連れて行くこうと思い、図書室からでようと季黎の体を引きずりながらドアを開けた。

あれ？

俺たちは夢を見ているかのようだった。光は自分の頭を思いつきり殴っている。殴りたくのも分かる。夢だっと思って思いたくなる気持ちも

分かる。

ドアを開けたら底や先が見えない真っ暗闇なのだから……。

ここに入ったら俺たちは明らかに可笑しくなる。今の状況を把握するんだ。

「な……何で先が見えないの？ 床が見えないよ？ 教室はどこ？ 私たちの頭がどうかしてるのかな？」

明奈は涙目で見えない先をずっと眺めていた。

大丈夫だ……明奈！これは夢なんだ……夢だ！現実に先が見えないなんてこと有るわけないんだから。

いきなり大きな狐の顔が、俺たちの目の前に現れた。

え……？

狐は俺たちを見て……。そして、特に季黎を見て、何かを企んでそのうな不気味な笑い声を響かせる。

『役2年間の時を越え……お前達に、あの苦しみ以上の苦しみを与えてやる。前みたいにこっくりさんに用いる紙は限定としない。私がか本当の”こっくりさん”だからだ。私が良いというまで、こっくりさんを毎回続けなさい。お前達に以前の記憶を授ける……』

そう言って狐は消えてしまった。

俺たちは訳も分からずその場に立ち尽くしていた。

こっくりさん……？記憶……？良いと言つまで？何が何だか俺たちは訳が分からなかった。

次の瞬間、原爆が落ちた時みたいに、目の前が真っ白に光り風圧が俺たちに襲いかかってきた。

俺たちはその場に気絶してしまった。数分後、俺たちは目を開けて”やっぱり夢だったのか”と思う事ができた瞬間……。季黎を除いて、俺たち4人にいきなりの頭痛が襲いかかった。

「ぐああああああ！」

皆の目からは涙が出ていた。そして俺の目からも 俺たち全員
以前の恐怖な記憶がよみがえってしまっていた。

第4話：「あふれ出す涙と過去」

俺たち4人は頭痛が収まらない。

「わっ……私達以前こっくりさんを……」

真理はそう言い、体中を振るわせながら溢れる涙を手で拭っていた。俺たちもガクガク震えている。俺は以前こっくりさんだった季黎を冷たい目で見つめた。季黎は許したけれど、まだゲームが終わっていないことに苛立ちを感じ、俺は壁を拳で何度も殴った。

「いや、いや……あんな思い、もうしたくない」

明奈は今でも消えそうな声で、俺に助けを求めるように見てくる。

「俺だつてあんなつ……終わったんじゃねえのかよ」

悔しそうに泣く光を俺はただ見ているだけしかできなかった。それより季黎だ……季黎にちゃんと話をしないと。

「おい、季黎、2年の時を越え、またゲームが始まったわけだけど……俺たち終わらせたはずだよな？」

「ちょっと！ 翔何言ってるの？ 季黎は関係ないじゃん」

明奈は俺に怒鳴りつける。きつと、関係無い季黎を責めている俺を見て悲しくなったんだろう。皆季黎がこっくりさんだなんて知らない。あの時、携帯の着信が鳴って俺だけ呼び出されたのだから。

「関係あるんだよ」

俺達の仲がこっくりさんを巡り、割れていくような気がして焦っているのも、俺だけではない。皆がこっくりさんの恐怖と仲間割れを恐れている。

季黎の胸元の服を強引に引っ張り、自分の元に引き寄せて、痛々しく睨む俺に季黎もさすがにビビっている。

「ふざけんなよ、テメエ。終わりっていったじゃねえか……全て終わりにしてくれたハズなのに、何でこんな事になってんのかちゃんと説明しろよ！」

「ちょっと、翔！　どついう事よ？」

真理は季黎をかばうように、俺の手を無理やり季黎から離させた。俺は悔しさと、悲しさに少しこらえていた涙があふれ出す。

「ッ……………」

俺は覚悟を決め、季黎を睨み皆に口を開こうとした瞬間、季黎は俺の腕を強引に掴んできた。

「だ……だめ、お願い」

言われたくないかのように、悲しい目で俺を見てくる。

何今更弱い事言っただよ、こっちの身にもなれ。

図書室に一時の沈黙が流れる。そんな中俺は、ゆっくりと口を開いた。

「竜崎季梨が前のこっくりさんだったんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7357a/>

狐神リアル・・・こっくりさん

2010年11月14日09時20分発行